

学校文法と品詞分布

—— 5 文型を中心に ——

附属高等学校 平岩 加寿子

1. はじめに

屈折語の判断基準に基づく伝統的品詞「分類」による英語の品詞説明は、理論的に無理があり、EFL (English as a Foreign Language) 学習者には混乱をきたすのみである。また、多くの者にとっての母語である日本語は、単語の形式(カタチ)で品詞を表すが、その概念は英語学習の妨げとなる。英語は一つの形で様々な品詞たる可能性を持つからである(e.g. *Am I making myself clear?* (形容詞)¹ *Can anyone suggest a good, clear, easy beginner's book to the Kabbalar?*(形容詞)、*He had time to get clear away.*(副詞)、*Carolyn cleared the table and washed up.*(動詞))。

とはいうものの、語順によって文法・意味関係を表す英語においては、全く品詞の概念なしには正しい文の構築は望めない。5文型を基本とする英語によくある文のパターンを習得できないまま学年が進行し、正しく文を構成することもできないばかりか、読みにおいても骨組みを見つけれないままである学習者は少なくない。

学習者が品詞を理解するのに困難さを伴う原因はいくつかある。言語間のシステムの差異は一対一対応ではないという理屈がわからないということ、英語は語順で単語間の文法関係を表す言語であるということが理解できないこと。そして最大の原因は、未だ適切な品詞論が確立されていないことにある。英語という言語における形式と品詞の不一致を見ても明らかだが、品詞は分類されるのではなく「分布」しているものである。この点において、認知言語学的カテゴリー観と品詞分布という考え方は実に適合する。

2. 根源的構文文法と品詞分布

クロフト(William Croft, 1991, 2001)は、根源的構文文法(Radical Construction Grammar)の中で次のように述べている。

[C]onstrutions are the basic units of syntactic representation, and categories are derived from the construction(s) in which they appear --- as the distributional method implies.

(Croft 2001: 4)

少なくとも単語というものは、構文の中においてのみ、そのステータスが決まるのであり、また、同じ構文の同じ位置で使われる語句は同じステータスを持つと考えることができる。

たとえば日本の英語教育では、5文型のうち、第2文型(S+V+C)のC(omplement)は「形容詞、もしくは

¹ この clear が形容詞であるかどうかは疑問である。3.2節を参照。

名詞」、第3文型(S+V+O)のO(bject)は「名詞」とであると説明する。² この、Cとしての名詞と、Oとしての名詞には区別はないのだろうか。また、Cとしての名詞と形容詞はどこに差異があるのであろうか。名詞には、形容詞と同等に(Cとして)使えるものと、そうでないものがあるのではないか。

ここを取り掛かり(3.1節)として、品詞間の境界線は曖昧であることを、実例を挙げながら確認したい。また、本稿において「名詞」「形容詞」等の品詞名で指すものは、1語とは限らない。前述のように英語は単語の形式によって品詞が決定されるわけではなく、たとえば私たちが「名詞」という場合、普通は「名詞句」や「名詞節」を含めているからである。認知言語学的文法観においては、形態素から語、句、節、そして物語に至るまでいずれのサイズであっても統一的に「形式一意味」の言語単位として扱うため、3節の議論の中にはよりサイズの大きいものも含まれる。

3. 品詞境界線の曖昧性

品詞を論ずる際、注意しておかなければならないことがある。それは、外界にあるものに名前(ことば)がタグ付けされているのではなく、私たちが(概念化者)が外界を解釈する方法でしか私たちは表現できないということである。もちろん、描写の仕方にはある程度の傾向はあるものの、ある場面の、どこを切り取って、どこをことばとして音声(あるいは文字)にするかは、そのことばを話している人の見方(construal)に依るのである。この意味において、人間の認知のいとなみがことばに大きくかかわっていることは疑いようもない。³

従って、単に「名詞」という際には、机上の“腕時計”も“隣の先生との会話の内容”も“背後で盛んに動いている印刷機の騒音”も“クラスの中で困っていること”も、そのような「カタマリ」として認識する限りにおいては、それは「名詞」として表出されうるのである。

このことは品詞論にのみ適応されることではない。ある場面のどこからどこまでが視界に入っているか(scope)、もしくはどの参加者に心を寄せているか(perspective)によって構文の選択にも大きな影響を与える。

- (1) a. *Floyd broke the glass with a hammer.*
- b. *A hammer broke the glass.*
- c. *The glass broke.*

(Langacker 2008: 369)

同じ状況を目撃した場合でも(1a)のように描写する場合も、(1b)あるいは(1c)のように描写される場合もあるだろう。

3.1 「名詞」と「形容詞」

イエスペルセン(Otto Jespersen, 1965)は、いわゆる名詞と形容詞両方を *nouns* と称している。名詞はモノを指すことば、形容詞はそのモノの様子を描写することばであるので、両者は切り離せない。より正確に言うのであれば、形容詞は名詞なしには成り立たない。その(イエスペルセンが *nouns* と呼ぶものの)下位分類として、*substantives*(我々のいう「名詞」と) *adjectives*(「形容詞」)があると彼は論じている。

² 論文の便宜上「5文型」という用語を使用しているが、筆者はこの考えに全面的に賛成しているわけではない。

³ 山梨(2012)はこのことについて、以下のように言っている。

われわれは、外界世界の対象に関し何らかのイメージを作り上げ、このイメージを介して外部世界の対象を把握している。イメージは、具体的な経験に基づいて形成される心的表象の一種である。われわれは、具体的な経験によって作られたイメージを介し世界を把握しているだけではなく、状況によっては付帯的なイメージを操作し、このイメージ操作を介して世界を理解し意味付けしている。

本節では、彼が「名詞」と「形容詞」を一つのカテゴリーに入れる妥当性を、5文型から考えてみたい。2節で触れたように、Cの位置に使用することのできる品詞は名詞と形容詞である。この、二つの品詞の境界が曖昧であることを、S+V+CやS+V+O+Cの二つの文型のCを分析することによって明らかにする。

日本語母語話者にとって英語学習を困難にするものの一つとして、可算名詞(count noun)と不可算名詞(質量名詞、mass noun)の別が挙げられるが、この区分のうち、後者はより形容詞に近いと考えられる。

ラネカー(Ronald Langacker)によれば、典型的な名詞は物理的なモノ(physical object)である。彼は名詞の原型を以下のように定義づける。

- a) a physical object is composed of material substance.
- b) We think of an object as residing primary in space, where it is bounded and has its own location.
- c) In time, on the other hand, an object may persist indefinitely, and it is not thought of as having any particular location in this domain.
- d) An object is conceptually autonomous, in the sense that we can conceptualize it independently of its participation in any event.

(Langacker 2008: 104)

上記の定義に当てはまるのは可算名詞に他ならない。かれは可算名詞の特徴を、境界があり(bounded)、内部が均質でなく(heterogeneous)、繰り返すことができる(replicable)ことであるとしている。反対に質量名詞の特徴は、境界がなく(unbounded)、内部が均質で(homogeneous)、自在に伸縮拡大ができる(expansible, contractible)ことであると定義する。文法的ふるまいにおいては複数形にならず、不定冠詞も付加されない。

しかしながら、可算名詞と質量名詞の別は絶対的なものではなく、話者の概念化の方法によりどちらにもなり得る。

- (2) a. Yellow is a nice color.
(proper noun)
- b. This yellow would look good in our kitchen.
(count noun)
- c. The ball is yellow.
(adjective)
- d. There's a lot of yellow in this painting.
(mass noun)

(Langacker 2008: 102)

では、第2文型のCの位置にどんなことばがくるか見てみる。

- (3) a. He is the chair of this conference.
(count noun)
- b. The place was disaster all over.
(mass noun)
- c. The place was dark all over.
(adjective)

上記3文のうち、(3a)と(3b)(3c)を比較すると、それぞれのふるまいには差異があることがわかる。可算名詞(3a)には(定)冠詞が付加されるが、形容詞(3c)には付加されない。また、(3b)の質量名詞は、主語 *the place* の性質(状況)を表している。(3c)の下線部は、主語の性質を表しており、主語の名詞の一つの特徴(均質な

内容)についての描写になっている。

つまり、第2文型のCの位置にくる語は(名詞であれ形容詞であれ)、主語の状態や立場を表すものである。このことから、名詞の中には、より名詞然としたものと、より形容詞に働きの近いものがあることがわかる。

また可算名詞であっても、形容詞的働きを表す(つまり、名詞の状況を描写する)役割を持つ語は、質量名詞的に、すなわち、形容詞と同様に使われることもある。実際、第5文型中のCでは、「名詞」は役職・立場を表す場合(不)定冠詞なしに用いる。

(4) *We chose Mr. Gray chair of the conference.*

これは、「名詞の説明語句」としての形容詞が補語であることから説明がつく。同様のことはドイツ語においてはより顕著である。

(5) *Ich bin Angestellter.*

I am an office worker.'

英語においては、名詞は名詞としてのふるまいをすることがほとんどであるが、一部、形容詞と同様の働きをすることもある。

3.2 「形容詞」と「副詞」

形容詞は名詞を修飾する語であるのに対して、副詞は名詞以外のすべての語句(や文全体)を修飾する役割を持つ。両者ともに修飾語句であるという共通点はあるが、構文中における形容詞の位置や働きは、副詞に比べれば単純である。

(6) a. *The place was dark all over.* (=3c)

(第2文型の補語、Sである名詞を修飾)

b. *They found him half naked and bleeding to death.*

(第5文型の補語、Oである名詞の修飾)

(ODE)

日本の学校教育で習得する5文型において形容詞が文の要素となるのは、「第2文型」と「第5文型」のCのみである。もちろん、形容詞を前置修飾(*the present president*)したり後置修飾(*the president present*)したりするのも形容詞の基本的用法である。

一方副詞が修飾するものは多岐にわたり、何を修飾するかによって位置も変わる。

(7) a. *Do you have a computer yet?*

(動詞を修飾)

b. *I'm still young, ain't I?*

(形容詞を修飾)

c. *He writes really well.*

(副詞を修飾)

d. *Frankly, I don't know what to think.*

(後続の文を修飾)

e. *Some of them were very sick. Yet everyone was smiling and helping each other*

(文と文を接続)

in spite of their illness.

5 文型とのかかわり而言えば、副詞は文の要素とはなりえず、文型の中でことさら注目されることはない。むしろ、注目すべきところまで排除して、文のパターンを五つに収斂しているところに学校文法の問題点はある。たとえば、(8b)の下線部のステイタスは何だろうか。

- (8) a. *It is the oldest book in the library.*
b. *He is in the library.*
c. *I learned the fact from the book in the library.*
d. *My father works in the library.*

上記4文の下線部はすべて同じ形(*in the library*、[前置詞]+[冠詞]+[名詞])だが、構文や修飾関係を考えて、その働きが一定ではないことがわかる。また、下線部 *in the library* を「品詞分類」すると、(8a)(8b)(8c)は名詞を修飾する「形容詞句」、(8d)は動詞を修飾する「副詞句」である。他方、(8a)と(8b)を比較してみると、コンピュータ動詞の次にくることばが、(8a)は[冠詞]+[形容詞]+[名詞]であり、(8b)は問題の[前置詞]+[冠詞]+[名詞]である。後者は形容詞と判断されるが、典型的な形容詞ではない。⁴ まったく同じ形で(7d)のように副詞と判断される場合もあることから、前置詞句は典型的な形容詞ではなく、むしろ副詞との境界線にあると言って差し支えないだろう。

句ではなく1語の形容詞についても同じことが次の例から言える。

- (9) a. *Susie found Ted naked.*
b. *Susie found Ted, naked.*⁵

この2文の内、(9a)は第5文型であり、下線部(形容詞)は直前の名詞 *Ted* を修飾している。つまり、「*Ted* が裸である」ことを表している。一方(9b)は、使用する単語も語順も(9a)と同一であるにもかかわらず、*naked* の前にポーズを付加することによって「*Susie* が裸である」ことを表している。音韻面の配慮が不十分であった「従来の」英語(構文)学習では全く考慮されなかった点である。

さて、(9b)の下線部の品詞は何であろうか。もちろん、*Susie* という名詞を修飾しているという点では、形容詞といって差し支えない。ところが、*Susie* が *Ted* を発見した時の状況(文全体の状況)を描写していると考えれば、一般的に「文修飾の副詞」と呼ばれる(7d)の下線部と同じ働きをしていると考えられないだろうか。⁶

形容詞と副詞はカタチを一にするものも多く(e.g. *Don't be late for school again. I'm running a bit late. When did you see her late?), それによって修飾されるものによって判断が揺らぐこともある。また、3.1節に見たように、名詞の中にも典型例と周辺例があるため、品詞は「はっきりと分類される」べきものではないことは明らかである。*

3.3 「名詞」と「形容詞」と「副詞」

筆者が高校生のときには

- (10) *I had difficulty in finding his house.*

の下線部は「動名詞」であり「名詞」であった。現在附属高校1年生が参考書として使用している *Best*

⁴ ここでは議論にしないが、(7b)は第2文型であるかどうか、学校文法では意見の分かれるところである。

⁵ これは京都大学の山梨教授が良く挙げる例である。

⁶ このような可能性を考えれば、(6b)の解釈も二つに分かれることになる。すなわち、「裸で血を流している彼らが、彼を発見した」かもしれない可能性はある。

Avenue to English Grammar; Usage & Structure(第3版、エスト出版)にはこのような説明がある。⁷

【Lesson 81】 分詞を含む重要表現

have trouble [difficulty] *doing* 「～するのに苦労する」

例文：I had no difficulty *finding* his house.

(中略)

Usage : *doing* の前に *in* をつけることもある。*in* をつけると、前置詞の目的語になるので、*doing* は動名詞に分類されることになるが、区別を気にせず、どちらも慣用表現として覚えておけばよい。⁸

くしくもこの参考書の執筆者(グループ)は Usage の部分で彼らの「品詞『分類』」に対する概念を明らかにしているが、自らの論の矛盾を無視している。すなわち、前置詞の有無によって「分類は異なる」にもかかわらず、その「区別は気にしなくてよい」と。彼らはおそらく次の3文に対して異なる「分類」を与えるであろう。

- (11) a. *I had no difficulty finding his house.*
(分詞、名詞の後置修飾をする形容詞的用法)
- b. *I had no difficulty in finding his house.*
(動名詞、前置詞の目的語である名詞)
- c. *Finding his house, I had no difficulty.*
(分詞構文、破線部も含めて述語動詞を修飾する副詞)

従来の品詞分類の立場に立てば、3者はそれぞれ異なる品詞に振り分けられるだろうし、それぞれの単語のふるまいから品詞を考えること自体に不合理性はない。しかし認知言語学的カテゴリー観ではより適切に説明をすることができる。すなわち、品詞は「分類」されるものではなく「分布」していると捉えれば、上記構文中の *V-ing* は動詞から派生した名詞・形容詞・副詞のすべてに渡って分布すると考えることができ、上記のような矛盾から解放される。

3.4 「動詞」と「名詞」

ところで英語では、動詞とそれ以外の品詞は大きな差異がある。それは、動詞にのみ時制という観念があるという点である。⁹ 文法的ふるまいにおいてそれは顕著であり、時制による変化は動詞の専売特許である。

⁷ 引用部分のイタリックは、引用元書籍に依る。

⁸ 前置詞 *in* が付加されるということは、実は別の構文であり、「分詞」の文と「動名詞」の文は厳密には同じことを表しているのではない。前置詞 *in* は「〈場所・空間〉の中で」が中心義であるため、*find* という行為を「領域のあるモノ」と見立てている(メタファー)が *in finding* である。詳しくは、瀬戸 (2007)を参照。

⁹ ラネカーはこの点において、外界を記述する方法において品詞という考え方を(直接は)用いず、*thing* と *relation* の2分法を採用している。彼によれば、*thing* は概念上、一定領域を占める具象化されたものであるとする。この意味において、*thing* には「～するモノ」や「～するコト」のような、高次の概念プロセスを経た結果も含まれる。一方 *thing* に対立するものが *relation* であり、これはさらに *temporal relation* と *atemporal relation* に分けられる。一般に、*temporal* が動詞、その他の品詞は *atemporal relation* に含まれる。この概念を用いれば、あらゆる事象を概念図(とラネカーが呼ぶ、言語化の抽象デザイン。基本的概念図は、丸や四角の図形と、それらを結ぶ線とで表わされる)で描写することができる。ラネカーのこの考え方は、外界を言語化する際の、いわば概念化とその表出のモデルであり、文法的ふるまい(有標性)まで視野に入れたクロフトの意味地図とは使用・応用範囲が異なる。なお、クロフトの意味地図とは、類型論的見地から見た、カタチと意味の写像関係を2次元で表現したもので、これを有標性を加味して用いると個別言語の品詞分布は適確に表すことができる。ただしクロフト自身が3次元での地図の妥当性を示唆しているように、2次元での配置には多少無理があることは否めない。

一方動詞から派生した語は、例えば 3.3 節の(11)の例文中 *V-ing* に明らかなように、「形容詞」とも「名詞」とも、また「副詞」とも取られる可能性がある。¹⁰ ただし、動詞には時制があるが、動詞派生の語は時間的感覚を(それ自体では)有したり表現したりすることができないため、少なくとも前後関係を表すには有標の形にするしかない。

- (12) a. *I will recognize him when I see him next.*
b. *I recognized him at once.*
c. *Having seen him before, I recognized him at once.*

述語動詞との時制の違いを表すには、(12c)のように完了相を用いるしかない。

また、上記の例とは異なり、動詞とカタチを同一にしながらも、各構文内での位置によって「動詞」とも「名詞」とも取られうる単語も多く存在する。道具性的名詞がその動作を表すように派生することはよく知られている。^{11, 12}

- (13) *a microwave oven / I microwaved a pumpkin and made it a side dish.*

(由本 2011: 128)

- (14) *an e-mail address / Please email me at h-kazuko@aecc.aichi-edu.ac.jp.*

これら以外の名詞が動詞として構文内で使用される場合、どの意味で動詞化されるかを由本はクオリア構造で分析した後、「名詞転換動詞の意味は、確かにコンテキストに依存して解釈される部分もあるには違いないが、その名詞が表す概念や指し示す事物について話者に共有されている知識さえあれば、それをもとに、「もっともありそうな意味」が話者の共通の理解として導き出せるのである」と結論付ける(由本 2011: 130-132)。たとえば(12)の例では、電子レンジは(現時点では)食べ物を温める機能のみが人間の実生活にとって重要であり、その部分しか *microwave* の表す動作たりえない。

一方、道具性的名詞ではない名詞が(もしくは名詞で)表す動作となると、その意味は予想が困難となる。由本は '*pepper the fish*' と '*bone the fish*' の 2 例を挙げ、前者は「(胡椒を)加える」のに対して後者が「(骨を)取り除く」という正反対の意味になっていることに注目し、それまでの議論と同じくクオリア構造を用いた説明の中で、「*fish* は *pepper* の目的役割にある『食品』に合致するので、そこに書かれている『ふりかけて風味をつける』という意味の動詞として成立する」が、*bone* にはそのような目的役割は認められないので、解釈のよりどころは「*bone* と *fish* は部分—全体の関係にあるということ」からしか見いだせない、という。しかしながら、「『取り除く』という動詞概念をどのようにして導き出すのかについてはよくわからない」としている。(由本 2011: 136-138)

文法上のふるまいとしては時制による活用を持つことができるのは「動詞」でしかないが、クロフトが根源的構文文法の中で提唱する意味地図上で、概念上最もかけ離れたところにある「名詞」と「動詞」は、カタチを共有しながらも両者の転換は頻繁である。ラネカーはいわゆる「動詞」の概念図にのみ時間間隔を表す“*t*”の記号と時の流れを表す矢印を付加するが、前景化されない時間概念が(少なくとも動詞派生の)名詞には含まれる点も留意すべきである。

¹⁰ *V-ing* のその他の可能性として、(a)前置詞、(b)接続詞、(c)間投詞となる可能性もある。

- (a) *He looks young considering his age.*
(b) *Considering he has no experience, he did quite well.*
(c) *Amazing! Your answer is perfect!*

¹¹ これを由本(2011)は名詞転換動詞と呼んでいる。

¹² ちなみに、本稿を Microsoft 社のソフトウェア Word2007 で作成したところ、(13)*microwave* の動詞には「辞書にない単語」のマークが付加され、(14)*e(-)mail* の動詞にはチェックが入っていなかった。Word2010 ではどちらもチェックは入っていない。一つの単語が他の品詞として使用可能と容認されるには、頻度の高まりを待つしかない。

3.5 「動詞」と「形容詞」

動詞と形容詞の分布を考察するにあたり、再び5文型に戻りたいと思う。第5文型におけるCのステイタスは、形容詞(的)であることは3.1節ですでに述べた。

- (15) a. *She always keeps her room clean.*
- b. *I heard my name called in the crowd.*
- c. *I heard someone calling my name.*
- d. *She had a taxi waiting for a long time.*
- e. *She had her students clean the classroom.*
- f. *I heard someone call my name.*

(15a)は「典型的な第5文型」である。(15b)から(15f)までも含めて同じ文の要素から成り立っていることを考えれば、上記6文すべてが第5文型であると分析される。それでは、下線を付したCにあたる部分はどう違うのだろうか。(15a)ではOである *her room* の状態を表すことば、(15b)でもOである *my name* がどうされているかという状態を表すことばであると解釈できる。これは、日本の学校文法に慣れてきた者でも「分詞は形容詞である」という概念が根付いているからに他ならない。そうだとすれば、同じく「分詞」で表わされている(15c)と(15d)のCも形容詞であると、すなわち、この2文は第5文型であるとみなすことに疑問を挟む余地はないだろう。さて、この2文の単語間の関係を見て見ると、(15c)はOである *someone* がする行為、(15d)はOである *a taxi* がする行為、をそれぞれ表しているのが下線部である。この考え方でいけば、(15d)と(15e)は同じ「使役動詞を使っている構文であるため、下線部のステイタスも同じということである。また、同じ「知覚動詞」を用いている(15b)、(15c)、および(15f)における下線部も同じであると結論付けることができる。

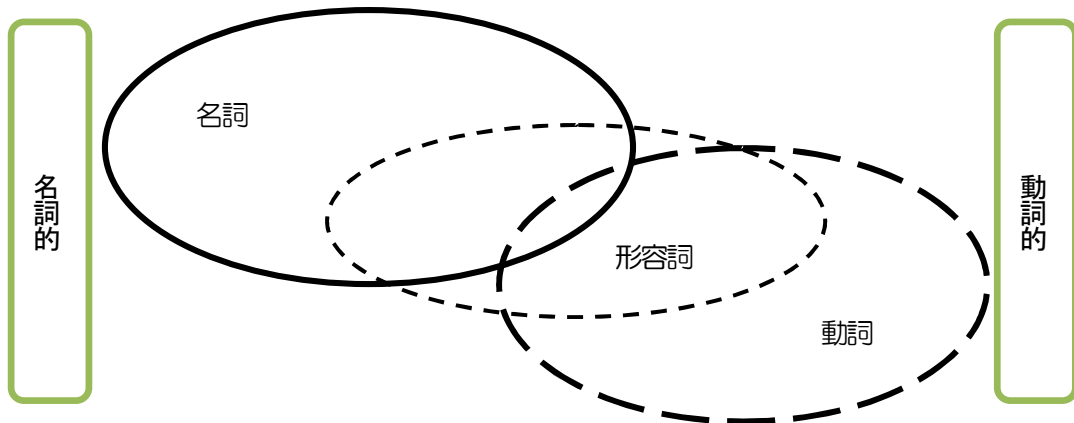
ここで注目したいのは(15e)と(15f)でCとして用いられている原形不定詞である。原形不定詞は、動詞の性質を残しつつ、特定の構文内では形容詞として機能する、ということである。学校文法では、*to* 不定詞に関しては、名詞・形容詞・副詞の各用法を認め、それを軸に教えるが、原形不定詞がナニモノであるかは全く触れられない。しかしながらこのように「構文」という単位で考察してみると、原形不定詞(=不定形)は動詞の形(なり)をした形容詞であることがわかる。前節では、時制を持つことが動詞の専売特許であると述べたが、より正確に言えば、定形動詞のみが時制を持つことができる。不定形の動作の時制は、定形の動詞である述語動詞に依ることからも、不定詞はまったくの動詞ではなく、動詞と形容詞の中間例であることがわかる。

4. 5文型と品詞分布

3節での議論のように、5文型を教える際には品詞という概念が必須であるにも関わらず、従来の学校文法では、ことさら品詞に注目して教授することが少なかった。また、品詞に対する考え方も曖昧であり、都合のいいところだけ「品詞論」を持ちだして、すべての語に応用可能な説明を与えることはなかった。それは、今までの学校文法が「5文型を教えること」に終始し、その意味を十分に精査してこなかったからではないか。そしてそれに加えて、正しい品詞論が提唱されていないことも大きな原因であると考えられる。

本稿では特に5文型を用いながら品詞間の境界が曖昧である(べきである)ことを論じてきたが、ここまでの議論をまとめると以下のように図式化できる(縦軸は、単語としての概念的自律性の高さを表している)。¹³

¹³ 「概念的に自立(*conceptually autonomous*)」とは、3.1節のラネカーの引用にも既出であるが、「人がある状況を見たときに、他の参与者とのかわりなしに独立して認識できるような事柄(*entity*)」のことである。一方動詞は「概念的に依存(*conceptually dependent*)」しており、「他の参与者とのかわりなしにはその動作や状態が認識できないような事柄」を指す。文法的ふるまいにおいては、その語が要求する項の数と同様に考えてもよい。



この図の特徴は、それぞれの品詞は決して独立しているわけではなく、むしろ、概念領域の中で重なり合いながら一定の位置を占めているということを明確に表している点である。

ただしこの分布図は、本稿における5文型を中心とした議論にのみ依拠しているため、文の要素となりえる「名詞」「形容詞」及び「動詞」のみの限定的な図になっているが、より詳細で広範な品詞分布は稿を改めることとする。

5. 学校教育への応用可能性

本稿では、5文型を教える際に使える品詞概念について述べた。このように考えると、各品詞間の境界はかなり曖昧で、既存の品詞間が大いに揺らぐのを感じる。たとえば3.5節に述べたように、今まで「名詞」「形容詞」「動詞」と信じ込んできたものが、特定構文内では(第5文型のCにおいては)同一視することも可能になるのである。このことを、より視覚的に生徒に訴えかけるため、今年度附高1年生の一部の生徒に対して、「認知文法的5文型」の教授を試みた。振り返ってみれば従来の5文型との相違点はそれほど大きくないのだが、品詞「分類」という考え方を払拭する一助にはなったのではないかと考える。少なくとも、当該生徒がその後英作文をする様子を見てみると、より品詞に対して敏感に、そしてより適切な品詞観を持って、取り組んでいることがわかる。以下がそのときの板書である。



(2012年4月23日3限 1年5組板書)

印刷では見にくいかもしれないが、一般動詞は直線矢印で、コピュラ動詞は曲線矢印で、主語は丸で、目的語は四角で表している。また、補語は点線の丸で表している。この図では、いわゆる第3文型の主語と第5文型の目的語が同じ観念で捉えられるようになっているし、第5文型の直線矢印の先に第2文型と同じ図式があるようになっている。

もちろん、この図式にもさらなる改良が必要ではあるが、「5文型を教えることに終始する」だけの悪しき学校教育からの脱却の足がかりにはなるのではないか。

参考文献

- Croft, William. 1991. *Syntactic categories and grammatical relations: the cognitive organization of information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- _____. 2001. *Radical construction grammar: syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- _____. 2006. *Constructions at work: The nature of argument structure generalizations*. Oxford: Oxford University Press.
- Hiraiwa, Kazuko. 2009. *V-ing nouns in the lexicon*. Paper presented at the 2nd International Spring Forum of the English Language Society of Japan.
- _____. 2011a. *V-ing adjectives in the lexicon*. In *Papers from the 11th national conference of Japanese Cognitive Linguistics Association*. JCLA.
- _____. 2012. *Teido to hindo to kanjou to [Degree, Frequency, and Emotion]*. Poster Session at the 13th national conference of Japanese Cognitive Linguistics Association. JCLA.
- Jespersen, Otto. 1965. *The philosophy of grammar*. New York: The Norton Library.
- Langacker, Ronald W. 2002. *Concept, image, and symbol: the cognitive basis of grammar* (2nd ed.). Berlin: New York: Mouton de Gruyter.
- _____. 2008. *Cognitive grammar: a basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Ross, John Robert. 1972. 'The category squish: Endstation Hauptwort'. In P. M. Peranteau, J. N. Levi, and G. C. Phares (Eds.), *Papers from the Eighth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 316-328.
- _____. 1973. 'Nouniness'. In Bas Aarts, David Denison, Evelin Keizer, and Gergana Popova (Eds.), *Fuzzy grammar* (pp.351-422). Oxford: Oxford University Press.
- Yamanashi, Masa-aki. 2012. *Ninchi imiron kenkyu [A study of cognitive semantics]*. Tokyo: Kenkyusha